グローバル・フォーラム会報

THE GLOBAL FORUM OF JAPAN BULLETIN

「中央アジア＋日本」対話開催さる 中央アジア・コーカサスとの連結性強化に向けて

グローバル・フォーラム（GFJ）は、３月15日、外務省との共催により、「中央アジア＋日本」対話・第 12 回東京対話：「中央アジア・コーカサスとの連結性」を開催した（写真）。

本対話では、昨年12月24日に東京で開催された、「中央アジア＋日本」対話・第９回外相会合での議論も踏まえ、「カスピ海」ルートの更なる活用を念頭に、中央アジア・コーカサス地域の連結性の強化、特に物流の円滑化と日本の関与のあり方について、関係者の間で意見交換を行った。

当日は、中央アジア側よりメデルベク・クルマンベコフ・キルギス運輸・通信次官、イクリム・カカムラドフ・トルクメニスタン国家関税局関税統計局長等に加え、日本側より渡辺まゆGFJ執行世話人、宇山智彦北海道大学教授等を含む総勢345名が出席し、活発な意見交換を行った。

当日の議論の模様は当フォーラムのホームページ上（http://www.gfj.jp/j/）で無料公開されている。

とくに注目された発言のみ次の通り。

●渡辺まゆ：中央アジアは、日本にとって、海への出口に向けた連結性、とくにロシアを経由しない「カスピ」海ルートを活用した連結性強化など、自由で開かれた持続可能な発展のために不可欠なパートナーである。本対話が担う役割は大きい。

●宇山智彦：今日のロシアによるウクライナ侵略戦争は、カスピ海の軍事的な意味を浮かび上がらせた。当面、日本や欧米とカスピ海沿岸諸国の協力にロシアとイランは見込めないが、この両国が平和国家として生まれ変わり、カスピ海が東西南北全方位の交流の場として復活することを望む。

●アルマン・アデプバエフ（カザフスタン）：我が国の輸送政策の主な目標は、ユーラシア大陸横断ブリッジを構築することにある。現在、この地域におけるトランジットハブになるべく、その取り組みを推し進めている。

●メデルベク・クルマンベコフ（キルギス）：我々の課題として、陸上輸送回廊の開発、デジタル輸送回廊の形成がある。今後、最適なルートと輸送条件などについては、デジタル化と法的な電子文書を用いて策定していきたい。

●フスラフ・ミルゾエフ（タジキスタン）：カスピ海横断国際輸送ルート（TITR）は、現時点で代替ルートであるが、今後この地域を結ぶメインルートになる可能性を有している。

米中対立とグローバル・サプライチェーンの行方

第352回国際政経懇話会は、５月31日に伊藤恵子千葉大学教授（写真）を講師に迎え、標題のテーマについて、次のような講話を聴いた。

近年米国では国家安全保障を重視し、追加関税措置から輸出管理・規制強化へと政策の重点を移してきた。例えば、2018年に「輸出管理改革法（ECRA）」を立法化し、デュアル・ユース品目を輸出管理規則（EAR）のもとで管理するほか、2020年にはEARの外国直接製品規制を強化し、米国の輸出管理規制を域外適用する範囲が拡大された。

今後、サプライチェーンの再構築を考える上では、サプライチェーンの効率性に加えて、リスクも考慮に入れなければならない。

経済学者としては自由貿易が重要だと考えている。しかし、経済活動を左右するのは、やはり人々の予想や意識である。他国が保護主義を強めれば自国民の保護主義も強くなる。

現在のようなかたちで貿易に対する規制や制限が容認されると、一時的な貿易縮小に収まらず、世界大戦のような事態を引き起こすレベルまで貿易縮小が拡大するのではないかと懸念している。

議論百出から

グローバル・フォーラムのホームページ（http://www.gfj.jp）上のe-論壇「議論百出」への最近３ヶ月間の投稿論文を代表して、下記論文を紹介する。

グローバル・サウスと日本

日本国際フォーラム上席研究員　高畑　洋平

2022年２月24日に始まったロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、未だ収束の目途が立たず、ウクライナ側も反転攻勢に乗り出すなど、戦況は予断を許さない。ウクライナ情勢をめぐって国際社会の分断が深まる中、いわゆる「グローバル・サウス（Global South）」と呼ばれる国々への注目が集まっている。

これら地域の国々は、一方では欧米的価値観を受け入れつつ、他方で、非欧米的価値観さえも受け入れながら、各々の国が独自の「自立の道」を見出し、国際社会を生き抜いてきた。こうした新たな現実は、そこにもはや、豊かな「北」と貧しい「南」という単純な二項関係は存在しない。むしろ「北」と「南」の相互関係の重要性の回帰とグローバル・サウス含めた、新しい多国間関係の再考を迫られているのではないか。

とりわけ、昨今の国政政治における「複雑性」の特徴を踏まえるならば、日本としては、「今、世界から日本はどう見えているのか」という視座を再認識するとともに、「価値共有」が可能な国と障壁がある国を正確に見極めつつ、グローバル・サウスなどを含めた、「包括的な価値圏」形成における「ゲームチェンジャー」になるべきではないか。

日本からの普遍的価値の共有の声を世界に響かせることこそ、国際社会に「競争を乗り越えた共走の未来」が訪れるきっかけになるのではないか。

（2023年６月１日付投稿）

最近３ヶ月間で注目されたその他の論文

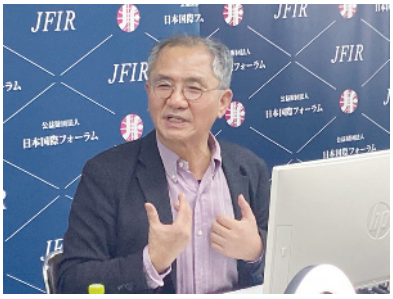
５/23　「Ｇ７サミットの意義とこれからの世界」（宇田川敬介）
５/16　「岸田首相『異次元の』少子化対策の財源問題」（舛添要一）
４/21　「次世代医療基盤法改正案について」（緒方林太郎）
３/１　「中国気球の米上空飛行問題」（美根慶樹）
２/24　「新興国にとってのIT産業が有望な理由」（近藤昇）
２/23　「すべては、こども達の未来のために」（長島昭久）
２/３　「世界経済フォーラムでは昆虫食を推奨」（浜田和幸）
１/25　「国際宇宙ステーションの危機」（船田元）

グローバル・フォーラム活動日誌（１－５月）

１月１日、３月１日、５月１日　『メルマガ・グローバル・フォーラム』（通巻第111号、第112号、第113号）発行
１月26日　第36回世話人会（石川洋氏他11名、「会議室」にて）
２月１日、４月１日　『GFJ- E -Letter』（通巻第96号、第97号）発行
２月27日　第184回外交円卓懇談会（林志弦氏他36名、オンライン）
３月15日　「『中央アジア＋日本』対話」（渡辺まゆ他344名、霞が関プラザホール）
５月31日　第352回国際政経懇話会（伊藤恵子氏他45名、オンライン）

東アジアにおける「記憶外交」

第184回外交円卓懇談会は、２月27日に林志弦・西江大学教授（写真）を講師に迎え、標題のテーマについて、次のような講話を聴いた。



周知の通り、東アジアでは、過去の歴史をめぐって、激しい対立や論争が続いている。しかし、こうした状況は、「沈黙」状態よりはるかに良い。なぜなら、人々が隣国の記憶文化について関心を有しているから騒ぐのだ。

驚くべき事実を１つ紹介しよう。日本の内閣総理大臣の靖国神社参拝が隣国の新聞で初めて報道されたのは1978年だ。つまり、それ以前は韓国人も中国人も日本の首相が靖国神社を参拝したか否かを気にしていなかった。すなわち、この事実は、隣国に対する人々の感性の弱さを示している。

しかし、記憶文化について、全ての点で合意はできない。今、問われるのは、その「不一致」をいかにして「共存可能な不一致」にできるかであろう。

歴史の解釈は多様であるべきで、教条的な単一の解釈を強いてはいけない。我々の共通の過去に対する解釈の違いは、一見すると深刻に映るかもしれないが、他方で、それは非常に良い兆候でもあるといえよう。

世話人会開催さる

新年恒例の第36回当フォーラム世話人会（渡辺まゆ執行世話人）が１月26日に都内で開催され、石川洋経済人世話人含む、総勢11名が出席した。当日は、前年度の「収支決算案」「活動報告案」等が承認された。

グローバル・フォーラム会報
2023年7月1日号(通巻第92号)

発行日　2023年７月１日
発行人　渡　辺　ま　ゆ
編集人　高　畑　洋　平

発行所　グ　ロ　ー　バ　ル　・　フ　ォ　ー　ラ　ム
〒107-0052　東　京　都　港　区　赤　坂　2-17-12-1301
［Tel］03-3584-2193［E-mail］gfj@gfj.jp
［Fax］03-3505-4406［URL］　http://www.gfj.jp/